

可算名詞と不可算名詞との間

前 田 浩

The Intricate Uses of Countable and Uncountable Nouns

Hiroshi MAEDA

要 旨

事物 (entity) を表す名詞が、可算名詞として具現されるか不可算名詞として具現されるかは、その事物に境界線があるかどうかによる。境界線がある場合は、「分離した、ばらばらの」(discrete) 存在として認識され、可算名詞として扱われ、境界線がない場合は、「連続した」(continuous) 存在として認識され、不可算名詞として扱われる。この区別により多くの事例の可算・不可算性が説明できるが、一筋縄ではいかない現象が英語には多く存在する。本稿では、このような事例を考察することで、英語の可算名詞と不可算名詞の使い分けの複雑な側面を提示する。最後に、「交通渋滞」を表す *traffic jam* と *traffic congestion* の違いについて考察し、可算名詞と不可算名詞の使い分けの手がかりとしたい。

Abstract

It is relatively easy for learners of English to learn the basics of countable and uncountable nouns. Entities with borderlines are described as countable nouns and ones without borderlines, uncountable nouns. However, things are not that easy. There are cases where the same thing can be embodied both as a countable and as an uncountable noun. This article considers the intricacies of countable and uncountable nouns. Chapter1 deals with four types of examples in which it seems very difficult to explain the differences between countable and uncountable nouns, and shows the intricacies of countable and uncountable nouns. Chapter2 tries to explain the differences between *traffic jam*, which is a countable noun, and *traffic congestion*, which is an uncountable noun, in the hope that the result can be a clue to unravel the intricate uses of countable and uncountable nouns.

0. はじめに

英語の名詞は大きく可算名詞と不可算名詞の2つに分けられる。現在のほとんどの英語学習辞典では、可算名詞は、それを意味する英語のcountable nounの頭文字から[C]という記号で表記され、不可算名詞は、同じくuncountableの頭文字から[U]という記号で表記される¹⁾。事物(entity)を表す名詞が、可算名詞として具現されるか不可算名詞として具現されるかは、その事物に境界線があるかどうかによる。境界線がある場合は、「分離した、ばらばらの」(discrete)存在として認識され、可算名詞として扱われ、境界線がない場合は、「連続した」(continuous)存在として認識され、不可算名詞として扱われる²⁾。(1)の具体例を見てみよう。

- (1) a. I live in a very small room.
b. Can you make room for me?

(1a)のroomは「部屋」という意味だが、部屋には四方に壁があり、上から見れば四角形のような明確な形がある。この壁が境界線の役割を果たした結果、「部屋」という意味のroomは可算名詞として具現される。一方、(1b)のroomは「空間」、「スペース」という意味だが、境界線がなく明確な形がないことから、不可算名詞として具現される。(1)の場合は、日本語で訳語が異なる例だが、そうでない例もある。(2)の具体例を見てみよう。

- (2) a. The hen laid a large brown egg.
b. You have egg on your chin.

(2a)と(2b)のeggはともに日本語では「卵」と訳され、訳語だけでは違いが説明できない。(2a)のeggは殻に入った状態の卵であり、殻が境界線の役割を果たし、「卵型」という日本語があるように明確な形をもっている。その結果、eggは可算名詞として具現される。一方、(2b)のeggは典型的には料理された卵であり、スクランブルエッグの欠片のようなものを意味する。スクランブルエッグには明確な形がなく、不可算名詞として具現される。訳語は同じでも指している事物の状態があきらかに異なる。

ただし、日本語では同じ意味だと認識されるが、英語に直した場合は、可算名詞と不可算名詞の両方に用いられる場合もある。(3)の例を見てみよう。

- (3) a. With all these experiences, you're the expert on leisure.

- b. With all this experience, you're the expert on leisure.

日本語の「経験」に相当するexperienceは、(3a)のように可算名詞にも、(3b)のように不可算名詞にもなる。ただし、(3a)のように可算名詞（複数形）として捉えた場合は、経験を形があり、個々の経験の集まりとして捉えており、(3b)のように不可算名詞として捉えた場合は、経験を量的に形がない存在として捉えていると考えられる。

上記のような例と考え方を基本に据え、英語の名詞を見ていくと、多くの事例が説明できる。ところが、事はそう簡単ではなく、日本人英語学習者から見て、不可解な、説明がつかない事例が多く存在する。本稿では、そのような事例を多く提示し、英語の可算名詞と不可算名詞の区別が一筋縄ではいかないことを示す。最後に、これらの例の不可解さに関して、解明できた例として、「交通渋滞」を意味するtraffic jamとtraffic congestionの可算性・不可算性に触れ、このような不可解な現象を説明する手がかりとしたい。

1. 不可解な現象

1.1. 事例1：-ache

1.1.1. 単独の場合

アメリカ英語では、-acheがつく(4)のような表現は可算名詞として扱われ、不定冠詞のaやanを伴う。

- (4) a. I have a toothache.
b. I have a stomachache.
c. I have a backache.
d. I have an earache.
e. I have a heartache.
f. I have a headache.

ところが、イギリス英語では、(5a) - (5e)のように可算名詞にも不可算名詞にも扱われ、不定冠詞のaやanは随意的(optional)である。ところが、(5f)のように、headacheだけは、絶対的に可算名詞として扱われる³⁾。

- (5) a. I have (a) toothache.
b. I have (a) stomachache.

- c. I have (a) backache.
- d. I have (an) earache.
- e. I have (a) heartache.
- f. I have a headache.

上記の点を確認するために、まず、『ジーニアス英和大辞典』の記述を確認してみよう。
acheにある [-ache語とU/C] という語法欄に(6)の記述がある。

- (6) a. toothache U [or (主に米) a ~]
- b. stomachache C (主に米), U
- c. backache C (主に米), U
- d. earache U [or (主に米) an ~]
- e. heartache U/C
- f. headache C

(6e)のheadacheにはアメリカ英語とイギリス英語の違いがない記述になっている点
が、(4)、(5)と異なることがわかる。

次に、英英辞典の記述も確認しておこう。イギリス系の辞書である*COBUILD
Advanced Learner's Dictionary*⁸ (以下、*COBUILD*⁸)の記述を(7)に、そのアメリカ英
語版である*COBUILD Advanced American English Dictionary*²の記述を(8)に引用する。

- (7) a. toothache: N-UNCOUNT
- b. stomachache: N-VAR
- c. backache: N-VAR
- d. earache: N-VAR
- e. heartache: N-VAR
- f. headache: N-COUNT
- (8) a. toothache: N-SING
- b. stomachache: N-VAR
- c. backache: N-VAR
- d. earache: N-COUNT
- e. heartache: N-VAR
- f. headache: N-COUNT

(7) と (8) の記述を比較すると, toothacheは, イギリス英語では不可算名詞, アメリカ英語では可算名詞単数形に, earacheは, アメリカ英語では可算名詞に, headacheは, イギリス英語でもアメリカ英語でも可算名詞になるのが特徴的である。他の-acheの付く名詞は, イギリス英語でもアメリカ英語でも可算・不可算の両方になることが読み取れる。

最後に, コーパスでも確認しておこう。イギリス英語のコーパスとしてBNC (= British National Corpus) のsimple search⁴⁾で当該の表現を検索すると (9) - (14) のようになる。コロンの右側の数字が当該表現の検索数を表している (以下同様)。

- (9) a. have toothache: 7
b. have a toothache: 1
- (10) a. have stomachache [stomach ache]: 0
b. have a stomachache [stomach ache]: 0
- (11) a. have backache: 1
b. have a backache: 0
- (12) a. have earache: 0
b. have an earache: 1
- (13) a. have heartache: 0
b. have a heartache: 0
- (14) a. have headache: 1
b. have a headache: 27

検索された事例が全くないか, 少なかったりして, 断定はできないが, -acheが付く例は可算名詞にも不可算名詞にもなるが, headacheを除き, どちらかと言うと不可算名詞として扱われることが多いことがわかる。Headacheに関しては1例, 不可算名詞の例が検索されたが, 圧倒的に可算名詞になることが確認された。

また, アメリカ英語のコーパスとしてCOCA (= Corpus of Contemporary American English) で当該表現を検索すると (15) - (20) のようになる。

- (15) a. have toothache: 0
b. have a toothache: 13
- (16) a. have stomachache [stomach ache]: 0
b. have a stomachache [stomach ache]: 20 (15+5)⁵⁾
- (17) a. have backache: 0

- b. have a backache: 6
 (18) a. have earache: 0
 b. have an earache: 0
 (19) a. have heartache: 1
 b. have a heartache: 0
 (20) a. have headache: 1
 b. have a headache: 156

(19a) のheartacheは1例のみ不可算名詞の例が検索されたが、事例が少なく一般化が困難である。その他はheadacheを除き、事例が検索された場合は、すべて可算名詞として扱われていることがわかる。(20) のheadacheの例に関しては、(20a) で不可算名詞の例が1例のみ検索されたが、その他の156例はどれも可算名詞として捉えられており、ほとんど絶対的に可算名詞として扱われていることがわかる。

また、正保(2016: 60)は〈痛みの言い方〉として、Quirk *et al.* (1985: 279)に基づき、(21)のように同様の指摘をしている(例文は省略)。

- (21) 痛みを表す、-acheのつく語は、イギリス英語では不可算名詞であることが多いが、一般論として痛みの種類を言う場合は不可算名詞として無冠詞で、具体的に襲ってきたある痛みの症状を言う場合は可算名詞として使われる。

1つの発作や痛みを言うときは、アメリカ英語ではふつう可算名詞で、イギリス英語では不可算名詞である(Quirk *et al.*: *A Comprehensive Grammar of the English Language*)⁶⁾。

headacheだけは常に可算名詞として使われる。

上記のことから、(4)、(5)の記述がおおむね妥当であると判断できる。さらにイギリス英語では、headacheを除き、-acheはどちらかという不可算名詞として扱われる傾向があることも判明した。

「痛み」に関する捉え方が、アメリカ英語とイギリス英語とで異なるとは考えられないが、上記のような実態がある。さらに、イギリス英語では、他の痛みと異なり、頭痛だけが常に可算名詞になるという事実も、日本人学習者にとって不可解であると言わざるを得ない。

1. 1. 2. 形容詞を伴う場合

-acheが形容詞を伴う場合は、上記の単独の場合と異なり、アメリカ英語、イギリス英語に関わらず、ほとんど義務的に不定冠詞を伴い、可算名詞として扱われる。

まず、BNCのsimple searchを利用して、イギリス英語の事例を検索すると、(22) - (27) の結果が得られた。

- (22) a. have bad toothache: 0
b. have a bad toothache: 0
- (23) a. have bad stomachache [stomach ache]: 0
b. have a bad stomachache [stomach ache]: 0
- (24) a. have bad backache: 0
b. have a bad backache: 0
- (25) a. have bad earache: 0
b. have a bad earache: 1
- (26) a. have bad heartache: 0
b. have a bad heartache: 0
- (27) a. have bad headache: 0
b. have a bad headache: 1

全部で、2例しか検索されなかったので、断定的なことは言えないが、どちらも予想通り可算名詞として扱われていることがわかる。

次に、COCAを利用して、アメリカ英語の事例を検索すると、(28) - (33) の結果が得られた。

- (28) a. have bad toothache: 0
b. have a bad toothache: 0
- (29) a. have bad stomachache [stomach ache]: 0
b. have a bad stomachache [stomach ache]: 0
- (30) a. have bad backache: 0
b. have a bad backache: 0
- (31) a. have bad earache: 0
b. have a bad earache: 0
- (32) a. have bad heartache: 0
b. have a bad heartache: 0
- (33) a. have bad headache: 0
b. have a bad headache: 4

これもheadacheの事例しか検索されなかったので、断定的なことは言えないが、検索された4例はどれも予想通り可算名詞として扱われていることがわかる。

以上のことから、-acheがつく名詞に形容詞がつくと、イギリス英語、アメリカ英語を問わず、ほとんど義務的に不定冠詞を伴い、可算名詞として扱われることがわかる。ただし、正保（2016：60）は（34）の例を挙げており、事が単純ではないことがわかる。

- (34) a. I had terrible *toothache* all last night. (LDOCE⁶)
 b. He was suffering from severe *earache*.

よって、この事例も日本人学習者にとって不可解であると感じられる。

1. 2. 事例2：cold

「風邪」という意味のcoldは典型的には（35）－（38）のようなコロケーションで用いられる。

- (35) a. catch (a) cold
 b. catch a bad cold
 (36) a. take (a) cold
 b. take a bad cold
 (37) a. get (a) cold
 b. get a bad cold
 (38) a. have a cold
 b. have a bad cold

（35）－（37）は「風邪をひく」という動作的意味を表し、（38）は「風邪をひいている」という状態の意味を表す。coldが単独で用いられた場合は、（35a）、（36a）、（37a）では、不定冠詞のaは随意的（optional）で、つけてもつけなくてもよいが、（38a）では、不定冠詞が義務的（obligatory）で、つけなくてはならない。換言すれば、（35a）、（36a）、（37a）のcoldは可算名詞としても不可算名詞としても扱われるが、（38a）のcoldは可算名詞として扱われる。

この辺の事情をコーパスで調べてみよう。ただし、事情によりgetについては検索を行わなかったためその結果は割愛する⁷⁾。まず、BNCのsimple searchを利用して、イギリス英語の事例を検索すると、（39）－（41）の結果が得られた。

- (39) a. catch cold: 23
b. catch a cold: 16
c. catch bad cold: 0
d. catch a bad cold: 0
- (40) a. take cold: 6
b. take a cold: 0
c. take bad cold: 0
d. take a bad cold: 0
- (41) a. have cold: 1
b. have a cold: 16
c. have had cold: 0
d. have a bad cold: 1

イギリス英語では、catchやtakeの目的語に単独のcoldを取る場合は、無冠詞で不可算名詞として扱われる方が、不定冠詞を取り可算名詞として扱われるより普通であり、haveの目的語に単独のcoldを取る場合は、圧倒的に不定冠詞を取ることが多く、可算名詞として扱われるのが普通だと言える。また、目的語に形容詞を伴うcoldを取る場合、どの動詞であれ、義務的に不定冠詞を要求し、可算名詞として扱われることも判明した。

次に、COCAを利用して、アメリカ英語の事例を検索すると、(42) - (45)の結果が得られた。アメリカ英語については、getの例も検索し、付け加えたが、get coldには「風邪をひく」と「寒く [冷たく] なる」の2つの意味があり、コーパス上ではその峻別が困難なため、get a bad coldとget bad coldのみ検索結果を加えた。

- (42) a. catch cold: 51
b. catch a cold: 70
c. catch bad cold: 0
d. catch a bad cold: 0
- (43) a. take cold: 1
b. take a cold: 0
c. take bad cold: 0
d. take a bad cold: 0
- (44) a. have cold: 4
b. have a cold: 112

- c. have bad cold: 0
- d. have a bad cold: 2
- (45) a. get bad cold: 0
- b. get a bad cold: 2

アメリカ英語ではcatchの場合、coldよりa coldの例がやや多いが、どちらも比較的用いられている。Takeの場合は、無冠詞の事例が1例しか検索されなかったことから、このコロケーションがまれなように思われる。Haveの場合は圧倒的にa coldの方が普通だが、無冠詞の例も4例あり、不定冠詞が義務的であるとまでは言えないことがわかった。Coldに形容詞がつく事例は4例しか検索されなかったが、不定冠詞を伴っており、予想通りであった。

正保（2016：58）はこれに関して、(46)のように記述している。

- (46) 現在はhave a coldの形が多く、無冠詞のhave coldという形は廃れつつある。get coldはget a coldより事例が多い、catch coldとcatch a coldはどちらも似たような数である。

また、『ジーニアス英和大辞典』のcoldの項には(47)の例文が挙げられ、「無冠詞が普通。ただし形容詞を伴う場合はcatch a bad *cold*のようにaが必要。」という注記が添えられている。

- (47) He **caught** [got (a)] **cold** yesterday.

catchの場合、catch coldとcatch a coldのどちらが普通なのか、若干意見が異なる。

いずれにせよ、catch, take, getに単独のcoldが付く場合には、coldは可算名詞にも不可算名詞にもなるが、haveにcoldが付く場合には、可算名詞になる点や、いずれの動詞に関しても、coldに形容詞がつく場合は可算名詞になる点は、日本人学習者には不可解であると言わざるを得ない。

1. 3. 事例3：suntan/sunburn

日本語の「日焼け」に該当する英語表現としてsuntanとsunburnの2つが挙げられる。この2語の意味をCOBUILDから(48)に引用する。

- (48) a. If you have a **suntan**, the sun has turned your skin an attractive brown colour.

- b. If someone has **sunburn**, their skin is bright pink and sore because they have spent too much time in hot sunshine.

(48) から、suntanは日焼けでも「小麦色の肌」のような日焼けを表し、sunburnは焼きすぎて、赤くなってひりひり痛むような日焼けを表し、意味が異なることがわかるが、suntanは可算名詞として扱われ、sunburnは不可算名詞として扱われていることが、不思議であり、興味深い。

*COBUILD*では、suntanがN-COUNTという表示から可算名詞になるのに対して、sunburnはN-VARという表示から可算名詞にも不可算名詞にもなることがわかる。したがって、sunburnは、常に不可算名詞として扱われるということではない。*COBUILD*には(49)のような例があり、可算名詞として扱われることもある。

- (49) *I was concerned that I was not protected and would get a sunburn.*

このsuntanとsunburnの可算性／不可算性について、アメリカ人インフォーマントに質問したところ、(50)のような反応が得られた。

- (50) I don't know why *suntan* is countable, but *sunburn* is uncountable. As a white boy who had sunburn every year, I used the word with the article "a" at times. Perhaps I was incorrect, but no one ever corrected my speech. I do, however, believe that there is a difference between the two: color. A suntan denotes that the skin has turned brown or tan, but sunburn denotes red, that is, burned, skin.

(50) の反応から、sunburnは時に可算名詞になることがわかるが、英語母語話者でもこの可算／不可算と違いの理由はわからないようである。また、違いは色にあることが確認された。Suntanと色はbrownであり明瞭であるのに対してsunburnの色はredやpinkでありやや不明瞭である。すると、(51)のような図式で、明瞭さは、境界線を生み、その結果可算名詞になり、不明瞭さは、境界線を生まず、その結果不可算名詞になるという見方もできるが、この見方が妥当なのか、いまのところまだ不明である。

- (51) a. clear→discrete→countable
b. vague→continuous→uncountable

suntanやsunburnの可算性／不可算性の問題はやはり不可解な現象だと言わざるを得ない。

1. 4. 事例4 : traffic jam/traffic congestion

「交通渋滞」を和英辞典で調べると、traffic jamとtraffic congestionという2つの表現が出てくる。この2つの表現は、例えば、『ジーニアス英和大辞典』でtraffic jamを引くと「=traffic congestion」という記述が見られように、一般には同義表現ということになっている。ところが、同じ意味であるにも関わらず、何故かtraffic jamは可算名詞として、traffic congestionは不可算名詞として扱われる。具体例を(52)に挙げる。

- (52) a. I was caught in a traffic jam.
b. *The problems of traffic congestion will not disappear in a hurry.*
(COBUILD⁸)

次に、それぞれのCOBUILD⁸の定義を(53)に挙げる。

- (53) a. A **traffic jam** is a long line of vehicles that cannot move forward because there is too much traffic, or because the road is blocked by something.
b. If there is **congestion** in a place, the place is extremely crowded and blocked with traffic or people.
(COBUILD⁸)

(53b) の場合は、congestionの定義なので、traffic congestionの定義としては、最後の部分をtrafficと解釈すればよいにしても、両者の間に明確な相違は感じられない。

アメリカ人インフォーマントに違いを尋ねたところ、はっきりわからなかったため、本人がWikipediaの情報を調べ、(54)の反応を示した。(55)はそのWikipediaの情報である。

- (54) I wasn't sure about this one, so I did a little checking. I found the following argument on Wiki, and it strikes me as valid. There is a distinction between the two: *traffic congestion* refers to when traffic slows down, but a *traffic jam* involves cars actually stopping. Perhaps that is one of the reasons. As for me, I can use them interchangeably.

- (55) a. **Traffic congestion** is a condition on transport networks that occurs as use increases, and is characterized by slower speeds, longer trip times, and increased vehicular queuing. The most common example is the physical use of roads by vehicles. When traffic demand is great enough that the interaction between vehicles slows the speed of the traffic stream, this results in some congestion.
- b. As demand approaches the capacity of a road (or of the intersections along the road), extreme traffic congestion sets in. When vehicles are fully stopped for periods of time, this is colloquially known as a **traffic jam** or **traffic snarl-up**.

(https://en.wikipedia.org/wiki/Traffic_congestion)

(55) から traffic congestion は車がゆっくり動いている渋滞であるのに対して, a traffic jam は車が完全に止まっている渋滞であるという違いが得られるが, インフォーマント本人は interchangeable であるとしているので, この違いが本当にあるのかは定かでない。また, 違いがあったとしても何故車がゆっくり動いている渋滞が不可算名詞になり, 車が完全に止まっている渋滞が可算名詞になるか不可解であると言わざるを得ない。

2. Traffic congestion と a traffic jam の可算／不可算性の説明

1章で可算・不可算性の違いの不可解さを表す例を4つ取り上げた。2章では, そのうちの事例4の traffic jam と traffic congestion について取り上げ, その違いについて説明を試みたい。

まず, 両者を COCA で検索すると, 興味深い結果が見えてくる。(56), (57) を見てみよう。

- (56) a. there is a traffic jam
b. be in a traffic jam
c. be stuck in a traffic jam
d. be caught in a traffic jam
e. wait in a traffic jam
f. sit in a traffic jam
- (57) a. increase traffic congestion
b. ease traffic congestion

- c. relieve traffic congestion
- d. reduce traffic congestion

(56)はa traffic jamをコーパスで検索して出て来た典型的な例を列挙したものである。(57)はtraffic congestionの同様の例である。これを見ると、a traffic jamとtraffic congestionが生じる言語環境は異なり、a traffic jamは具体的な感じを受け、traffic congestionは一般的な感じを受けることがわかる。

そこで想起される事例は、英語の可算・不可算の区別の一例として、個別的・一般的という場合がある。Languageの例を考えたい。Languageは「言語一般」を表す場合は、(58a)のように、不可算名詞になるが、日本語、英語などの「個別言語」を表す場合は、(58b)のように可算名詞になる。

- (58) a. Language makes possible the exchange of ideas between men.
- b. Japanese is said to be an illogical language.

この例と同様の見方をすると、a traffic jamは具体的な、個々の渋滞を表し、traffic congestionは、渋滞一般を表すという違いがあるという結論に達する。そこで、(59)に、コーパスでtraffic congestionが生起する典型的な用例から、(60)に、同じくa traffic jamが生起する典型的な用例から、それぞれ、例文を作成し、インフォーマントチェックを試みた⁸⁾。

- (59) a. Adding highway capacity can solve {traffic congestion/*a traffic jam/traffic jams}.
- b. The bus lanes are designed to ease {traffic congestion/*a traffic jams/traffic jams}.
- c. Do you feel {traffic congestion is a problem/*a traffic jam is a problem/traffic jams are a problem}?
- (60) a. There was {?traffic congestion/a traffic jam} in downtown Osaka.
- b. I was stuck in {??traffic congestion/a traffic jam} on the freeway.
- c. The accident caused {?traffic congestion/a traffic jam}

(59)の例では、traffic congestionとtraffic jamsが自然である。A traffic jamは個々の交通渋滞を表しているとする、(59)の文脈では容認不可能であることが説明できる。また、traffic congestionはtraffic jamsと交換可能(interchangeable)であるこ

とがわかる。可算名詞を無冠詞複数形で用いた場合、一般的意味を表す「総称名詞句」(generic noun phrase) になることから、traffic jamsは総称的意味を持ち、同様に、traffic congestionも予測通り総称的意味を持つことが証明された。(60) の例では、a traffic jamは自然であるが、(60a)、(60c) のtraffic congestionは容認可能だがやや不自然で、(60b) のtraffic congestionは極めて不自然であることからして、a traffic jamは個別の交通渋滞を表していることが確認された。さらに「交通渋滞」の「量」を問題にする(61) のような文脈では、「不可算名詞」が自然であるということがわかる。

- (61) The bus lanes are designed to ease {traffic congestion/*a traffic jam/?traffic jams}.

また、可算名詞が複数形無冠詞で用いられた場合、総称的意味の他に特定の意味を持つ。したがって、複数の交通渋滞に言及する場合は、traffic jamsとなることは言うまでもない。例文を(62) に挙げておくことにする。

- (62) There are traffic jams around this area.

以上のことをまとめると(63) のようになる。

- (63) a. Traffic congestionとa traffic jamの差は「総称的」と「個別的」の違いである。したがって、総称的意味で用いる場合はtraffic congestionが好まれ、個別的な意味で用いられる場合はa traffic jamが好まれる。
 b. Traffic jamは可算名詞として複数形無冠詞で用いると「総称的」意味を持つので、traffic jamsはtraffic congestionと等価になる。
 c. Traffic jamsとした場合には、「総称的」な意味の他に「個別的意味」を有し、個別に見た複数の交通渋滞を指すこともある。
 d. 「交通渋滞」を「交通量」という視点で見たときは不可算名詞としてtraffic congestionが好まれる。

2. まとめ

一見すると不可思議な可算・不可算という違いが、「総称」、「個別」という視点から捉えると説明できる事例があることがわかった。このような視点で見ると、-acheの冠詞の有無も説明できる可能性がある。正保(2016:60)の(21)記述に、まさに、

「一般論」, 「具体的」という表現が用いられ, 本稿の「総称」, 「個別」という表現と似ていることがわかる。ただし, 正保 (2016: 60) は続けて, (22) のように述べ, 不可解な側面もあることを示唆している。-acheその他の事例の可算・不可算の相違については, 稿を改めて論じたいと考えている。

*本稿は, 2016年1月9日に日本比較文化学会関東支部例会で行った「一筋縄では行かない英語の文法規則」というタイトルの研究発表の事例の一部を取り上げ, それに加筆, 修正を加え, 発展させたものである。インフォーマントについては新島学園短期大学のRichard Maher専任講師を通じて複数の英語母語話者に依頼した。Maher専任講師に感謝申し上げる。

注

- 1) 「可算名詞」, 「不可算名詞」は日本語では, それぞれ, 「数えられる名詞」, 「数えられない名詞」とも呼ばれる。英語では, countable noun, uncountable nounの他に, それぞれ, count noun, noncount noun, さらに不可算名詞の場合には「質量名詞」という意味でmass nounとも呼ばれる。
- 2) ここでの「境界線」, discrete, continuousという概念はロス・ロス (1988: 102-116) の「『境界線』のある単語が数えられる」という部分の記述を基にしている。
- 3) この-acheのつく語に関するイギリス英語とアメリカ英語における可算・不可算の違いは, 『Student Times』のQuestion Boxのようなコーナーで回答者のアメリカ人V. E. Johnson氏が指摘し, 興味深く思った事例だと思われるが, 出典が不明確である。
- 4) BNCのsimple searchは2015年12月31日をもって提供を終了した。したがって, 本稿のsimple searchのデータは2015年12月に得られたものである。
- 5) 括弧内は, stomachacheと一語で綴られた事例が15件, stomach acheと二語に綴られた事例が5件あるという意味で, 結局, 全部で20の事例が検索されたことを意味する。
- 6) 正保 (2016: 60) が参考にしたQuirk *et al.* (1985: 279-280) の記述を (i) に引用しておく。

(i) *Headache* is always a count noun:

I have a *splitting headache* this morning.

Other nouns formed from *ache* are treated as noncount when they denote a condition:

Nuts give me *toothache*.

When they denote a single attack or pain, they are usually count in AmE and noncount in BrE:

On and off she suffers from *a stomachache* (esp AmE) / *(the) stomachache* (esp BrE).

- 7) 当初, 比較文化学会関東支部例会での研究発表のためBNCのsimple searchで調査をした時にはget (a) coldのコロケーションは念頭においていなかった。そこで, 今回, 論文執筆をする際, getのコロケーションの調査を加えようとしたが, 残念ながら, BNCのsimple searchの提供が終了したため, 調査が不可能になったことを意味する。
- 8) この部分のインフォーマントチェックは, 新島学園短期大学のRichard Maherアメリカ人専任講師に協力をお願いした。

引用文献

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

正保富三 (2016) 『英語の冠詞がわかる本 [改訂版]』東京：研究社.

ピーターロス・ロス典子 (1988) 『原因別日本人が間違いやすい英語』東京：朝日出版社.